

令和7年度第1回前橋市総合教育会議 議事録

日 時 令和7年8月26日（火） 午後2時30分から午後3時30分まで

場 所 議会庁舎6階 第2委員会室

出席者

【会議構成員】

（市長）小 川 晶

（教育委員会）

教育長 吉 川 真由美

教育長職務代理者 奈 良 知 彦

委 員 畠 山 正 文

委 員 渡 辺 照 子

委 員 北 爪 麻衣子

（副市長）

猪 俣 理 恵

（事務局【教育委員会】）

教育次長 高 松 秀 光

指導担当次長 酒 井 暁 彦

総務課長 高 橋 良 祐

（事務局【市長部局】）

未来創造部長 阿佐美 忍

政策推進課長 高 瀬 大 輔

1 開 会

(午後2時30分)

2 あいさつ
(市長)

- ・令和7年度第1回総合教育会議の開会にあたり、教育委員会の委員や関係者に感謝を申し上げるとともに、会議を通じて多様な議論を行うことを期待している。
- ・総合教育会議は市長、教育長、教育委員が意見交換を行う場として開催されており、昨年度はこどもの生きる力を育むための政策や教育委員会と他部署の連携について議論が行われた。
- ・今年度の会議では、社会の変化に対応した教育について議論する予定であり、学校の在り方や教育の現状、課題、解決策、今後の方向性について意見をいただきたい。
- ・会議を通じて教育行政の充実とこどもたちの未来を担うための連携と協力を深めることを目指すため、協力をお願いしたい。

(教育長)

- ・総合教育会議の目的のひとつとして、教育の振興基本計画や教育の大綱など重要なテーマについて議論する場でもある。
- ・今回のテーマである社会の変化に対応した教育について活発な意見交換を期待している。
- ・市民を代表する教育委員と市長が連携し、こどものまち前橋を目指して取り組むために、限られた時間の中で有意義な議論を行いたい。

3 議 事

「社会の変化に対応した教育『こどもが通いたくなる学校』」

(市長)

- ・昨年の会議で渡辺委員から、小学校が6年間遊びを探究する場所になると良いという意見が出され、そのキーワードが印象的である。学校で過ごす時間は学力を高めるだけでなく、体験や挑戦する力を育む場であるべき。楽しい体験だけでなく、つらい体験を乗り越えることも含めて重要である。
- ・こどもたちが通いたくなる学校の理想像として、地域の意見やこどもたちの現状を踏まえた議論が求められている。具体的なアイデアやテーマについて意見を伺いたい。
- ・フリートーク形式で自由な対話を通じて、こどもたちが通いたくなる学校のあり方について議論を進めたい。

(北爪委員)

- ・学校での体験教育が減少していることが保護者の間で実感されており、特にコロナ禍でその重要性が再認識されている。体験活動が縮小されたことで、必要性が明確になったとの意見が出ている。

- ・地域での体験活動の場を提供する取組を行っており、例えば田植え体験会などが開催されている。保護者からはこどもたちに多くの体験をさせたいという強い要望が寄せられている。
- ・女性農業者との交流で、農業体験（稲刈り・餅つきなど）を通じてこどもたちに一次産業の重要性を伝えたいという強い思いが共有されている。多くの農業者が「伝えたいけれど、どう伝えればいいのかわからない」と悩んでいる。学校や公民館などの施設を活用して地域連携を強化していけば、前橋市の強みになる可能性がある。
- ・学校現場での体験の広がりや課題としては地域によって農業体験の機会に差があるが、野菜栽培など多様な体験が行われている学校もある。教育委員会が情報発信を強化すれば、保護者や地域住民が体験の場にアクセスしやすくなる。
- ・こどもたちに「通いたくなる学校とは？」と質問したところ、安心感や快適さ（例：おやつ持参、ウォーターサーバー）が求められていることが分かった。特に「クラスの人数が少ない方がいい」という意見が印象的で、多様な意見を尊重する現代の授業スタイルでは、少人数の方が話し合いがしやすいという理由だった。こどもたちは「人数が少ない＝寂しい」ではなく、「安心できる環境」として捉えている。

（渡辺委員）

- ・特別なイベントだけでなく、日常の学校生活そのものが体験であるという視点がある。例えば、階段を上る、窓から景色を見るなど、日常の中で感性を育むことができる。学校が「安心できる場所」であることが、こどもたちが通いたくなる大きな要因になる。また、教師や友達とのコミュニケーションが丁寧であることが、安心感につながる。

（畠山委員）

- ・自己肯定感には2つのレベルが存在する。1つ目は行動レベルの自己肯定感で、努力や成果を通じて自分に自信を持つことを指す。例えば、勉強やスポーツで成果を上げたり、仕事で昇進することが該当する。2つ目は存在レベルの自己肯定感で、成果が伴わなくても自分をかけがえのない存在として肯定できることを指す。この自己肯定感には、安心、遊び、自由の3つの要素が重要である。
- ・現代社会では行動レベルの自己肯定感を高めるために努力する一方で、存在レベルの自己肯定感が揺らいでいる人が増えている。これがこどもの自殺問題などの深刻な課題につながっている。
- ・存在レベルの自己肯定感を育むためには、安心できる環境が重要である。例えば、学校が安心できる場所であることや、コミュニケ

	ーションが丁寧に行われることが必要である。 ・かつてのコミュニティでは、個々の存在が緩やかに肯定される文化があったが、現在では一定の基準に従わなければならないというプレッシャーが強まり、自己否定が増加している。
(教育長)	・学校が「安心できる場所」であることは重要だが、現状では先生方が多忙で、こどもを丸ごと受け入れる余裕がない場合もある。一部の学校では、月曜1時間目を探究の時間にするなど、登校しやすい工夫が始まっている。SNSなどの影響で、こどもたちは広い社会と自分を比較しやすくなり、自己評価が下がる傾向がある。
(奈良代理)	・授業そのものが体験であり、「できた」「わかった」という感動が自己肯定感につながる。 ・教員の資質向上が重要であり、授業の中でこどもの心を動かすような工夫が求められる。総合的な学習の時間を活用し、地域の人材(例：手芸、朗読、昔話など)と連携することで、豊かな体験が可能になる。また、〇〇先生に会いたい、授業での気付きなども体験と言えると思う。学校は植物園でもあり、動物園でもあり、美術館でもある。(＝心の動く毎日を送ってもらいたい) ・あまりにも大人が手を入れ過ぎている感じを受ける。
(指導担当次長)	・こどもたちをお客さんの的に扱うのではなく、できる前提で接する必要があると思う。(特に小1・中1) ・こどもたちが自分で考え、動き出せるような「する授業」が理想。課題を自分ごととして捉えられるような授業設計が必要。 ・授業の質を向上させることが、教育現場の課題解決に繋がる。例えば、こどもたちが主体的に学ぶ授業を増やし、達成感を得られる体験を日常的に提供することが重要である。 ・先生方の研修は非常に重要であり、オンライン研修やYouTubeを活用した効率的な研修方法が求められている。研修を通じて授業力を向上させることが、こどもたちの学びの質を高める鍵となる。
(畠山委員)	・先生方もワクワクしながら、授業の問題を考える人もいて、そうなるのが理想的。 ・自己肯定感の構成要素として「安心 → 遊び → 自由」の順番が重要であり、特に「自由」は日本人にとって誤解されやすい概念がある。 ・「自由」が「わがまま」や「自分勝手」と混同されることがあるが、

これは「解放 (liberation)」の意味に近く、秩序の崩壊を招く可能性もある。一方で、「freedom (フリーダム)」は、自分自身に由来する選択と責任を伴う自由であり、教育において育むべき価値ある概念である。

- ・自由を正しく育てるには、自分に軸を置く教育が必要。学校や教室に依存するのではなく、こども自身が自分の判断で行動できる力を育てるべき。現状では、自由の扱いが曖昧で、「何でもいいよ」と放任することで秩序が失われる懸念もある。
- ・教育現場では、自由の本質を理解し、責任ある選択を促す教育のあり方を模索する時期に来ている。

(奈良委員)

- ・先生方の多忙化が深刻化しており、特に教頭職は非常に負担が大きい。教頭は朝早くから夜遅くまで働き、メンタル面での負担も大きい状況である。管理職を目指す人が減少していることが教育現場の危機的状況を示している。
- ・先生方の多忙化を改善するためには、教頭2人制の導入や、校長・教頭の業務負担を軽減する仕組みが必要である。
- ・少人数学級の良さもあるが、適正規模の見直しの時期に来ている。
- ・都市計画と教育行政が連携し、50年先を見据えた学校配置を考えるべきであり、統廃合によって管理職の数を調整し、人的資源の効率化も可能になる。
- ・教育は将来への投資であり、予算をかける価値がある分野である。

(教育長)

- ・教育委員会のOBを教職員の相談役として活用するなどの取り組みが進められている。
- ・地域の高齢者や住民は、学校やこどもたちを支援したいという意欲が高い。
- ・コミュニティスクールの導入により、学校・PTA・地域が連携して課題を共有・解決する体制が整いつつある。
- ・授業以外の活動(見守り、読み聞かせなど)に地域の力を活用することで、教員の負担軽減と地域理解の促進が期待されている。
- ・地域の力を活用してこどもたちの居場所を提供することが重要である。教育懇話会やPTAからも地域の力を借りたいという声が多く、学校と地域の連携が求められている。
- ・こどもの人口減少に伴い、小規模校が今後増加する見込み。教育委員会では、小規模校が3年間継続した場合に地域との話し合いを開始する方針。
- ・地域との協議を通じて、小規模校の維持や今後の在り方について

検討が進められる予定。

(市長)

- ・現在、学校のクラスは基本的に30人程度で構成されている。
- ・1年生から6年生まで同じメンバーで過ごすことの是非については、見直しの余地がある。
- ・学年が上がるごとに異なる人と関わる機会を持つことの重要性も指摘されている。
- ・教室の人数は30人程度が適切と感じるが、今後は多様な意見を聞きながら柔軟に検討していきたいという姿勢が示された。
- ・玉村町の上陽小学校では、インクルーシブ教育のモデル校として、障害のあるこどもたちが普通教室に通うほか、校内にホットルームというフリースクールのような場所を設け、不登校を防ぐ取り組みを行っている。

(渡辺委員)

- ・こどもたちが通いたくなる学校を作るためには、物理的な居場所だけでなく、心の居場所を提供することが重要である。先生や保護者も認められる環境が必要であり、それがこどもたちの自己肯定感向上に繋がる。

(畠山委員)

- ・教師だけでなく、保護者の心のゆとりも大事。校内フリースクールは、全国的にも広がりつつある。ここ10年くらいで、支援クラスへの考え方が大きく変わってきている。(=今の基本は自分でどこに所属したいかを決める)

(教育長)

- ・こどもたちが「自分は今どう感じているか」「どう行動すべきか」を自分で吟味・判断する機会を学校の中で増やすことが重要。こうした機会が増えていることは、教育の良い変化として評価されている。
- ・こども基本条例の策定に向けた対話の場では、こどもたちが「こんなに言っているんだ」と開放された表情を見せていた。学校現場でも、こどもの声をもっと大切にする必要があるという認識が共有された。
- ・こどもの自己肯定感を高めるには、周囲の大人(教員・保護者)もハッピーであることが不可欠。大人が認められ、心に余裕があることで、こどもを認めることができる。
- ・教育も「三方よし(子供よし・大人よし・社会よし)」の視点で考えるべき。
- ・こどもの幸福が大人の幸福につながり、社会全体の幸福にも波及

する。教育の課題をこどもだけに限定せず、大人や社会の在り方も含めて考えることが重要である。

(市長)

- ・こどもの声を聞くことが自己肯定感や幸福感の向上に繋がる。子ども基本条例の策定に向けたワークショップでは、こどもたちが積極的に意見を述べ、差別やいじめのない社会を目指す発言があった。
- ・学校の授業や地域の活動において、こどもたちの意見を取り入れることが重要である。こどもたちの考える力を活用し、大人と共に教育や社会をより良いものにしていく取り組みが期待されている。
- ・ワークショップに参加したこどもたちは、不登校の仲間にも権利を伝えたいという思いやりのある意見を表明していた。
- ・差別やいじめのない社会を目指したいという声もあり、安心できる環境への強い願いが感じられた。
- ・こどもたちには、自分の考えを持ち、社会に対して提案する力があることが明らかになった。学校や地域で物事を決める際には、こどもたちの意見をしっかり聞き、反映することが重要。
- ・授業も、こどもたちと一緒に考えながら作っていくことで、より意味のある学びになる。
- ・大人もこどもと共に考え、協働する姿勢が求められている。
- ・学校はこども・教員・保護者にとってのプラットフォームであり、安心できる場所であるべきである。
- ・コミュニケーションの質と授業のあり方の見直しが、今後の教育施策の重要な柱であり、教育行政は、こどもの声を反映しながら、地域・家庭・学校が連携して進めていく必要がある。

4 閉 会

(午後3時30分)